プレスリリース

平成 15 年 5 月 1 日
水産庁
独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所

平成 15 年度第 1 回日本海漁況予報
「平成 15 年度日本海マアジ長期漁況予報」

―別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果―

今後の見通し（2003 年 5 月～2003 年 9 月）

来遊量は、日本海西部において前年を上回り、中部以北で前年並みかこれを上回る。

1．本予報は水産庁のホームページ（http://www.jfa.maff.go.jp/）及び水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(http://abchan.job.affrc.go.jp）に掲載されます。なお、本予報については、日本海区水産研究所のホームページ(http://www.jsnf.affrc.go.jp）からもアクセスできます。
2．本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下のとおりです。

水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班　担当：竹葉、狭間
住所：〒100-8907　東京都千代田区霞ヶ関 1-2-1
代表：03-3502-8111（内線 7376）　ファックス：03-3592-0759
直通：03-3501-5098
電子メール：toru_hazama@nm.maff.go.jp
（独）水産総合研究センター日本海区水産研究所企画連絡室
住所：〒951-8121　新潟市水道町 1 丁目 5939-22
電話：025-228-0451　ファックス：025-224-0950
電子メール：fra-jki@ml.affrc.go.jp

参　加　機　関

島根県水産試験場 鳥取県水産試験場 兵庫県立農林水産技術総合センター 　但馬水産技術センター 京都府立海洋センター 福井県水産試験場 石川県水産総合センター 富山県水産試験場 新潟県水産海洋研究所	山形県水産試験場 秋田県水産振興センター 青森県水産総合研究センター （社）漁業情報サービスセンター 水産庁漁場資源課 西海区水産研究所 日本海区水産研究所

日本海マアジ（島根県～新潟県）の漁況予報

今後の見通し（2003（平成 15）年 5～9 月）
　対象海域：島根県～新潟県
　対象漁業：まき網、定置網
　対象魚群：0 歳魚（2003 年級群（2003 年生まれ））、1 歳魚（2002 年級群）、2 歳魚（2001 年級群）

日本海西部海域（夏以降の中部以北海域を含む）では、1 歳魚が主体で、夏以降は 0 歳魚の割合が増加し、来遊量は前年を上回る。中部以北海域でも 1 歳魚が中心で、前年程度かこれを上回る来遊が見られる。

※注：この報文では、「前年」は 2002（平成 14）年 5～9 月を示す。また、「体長」は尾叉長で測定した。

漁況の経過（2002 年 3 月～2003 年 2 月）及び見通しについての説明

1. 資源状態

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系資源の一部であり、その動向は東シナ海域の資源状態と密接に関わっている。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北域、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0 歳魚として対馬暖流に沿って山陰、中部海域から能登半島以北に分布を広げる。越年して 1 歳魚となると、春季に九州西・北域から日本海西部で漁場を形成し、その後中部以北に分布を広げる。成熟につれて日本海の中での越冬傾向が強くなり、やがて地付き群として、あるいはそれらが産卵した次世代の群れが、中部以北海域で漁場を形成するものと思われる。日本海における漁獲の主体は東シナ海～九州西・北域に由来する前者であるが、その資源豊度が低くなると,（相対的に）日本海中部以北における漁獲が重要な意味を持つことがある。

対馬暖流系の資源は 1993～1998 年に高水準を示したが、その後は低い水準にある。この高水準期には対馬暖流域全体で約 20 万トンの漁獲を維持していたが、2000 年には 15 万トン、2001 年には 13 万トンと減少した。日本海では、3 月～翌年 2 月の集計になるが、1998～1999 年に日本海主要港（島根県～新潟県）への水揚げ量が約 94,000 トンだったが、その後、1999～2000 年に 65,000 トン、2000～2001 年に約 54,000 トンと減少した。

2. 漁況の経過

2002 年 3 月～2003 年 2 月における日本海主要港（島根県～新潟県）への水揚げ量は約 42,000 トン（各府県の速報値等の集計による）であり、前年同期の約 45,000 トンをやや下回り、高水準期の半分に満たなかった。漁況は全般的に低調に推移したが、日本海

西部の沿岸漁場では 9-10 月を中心にまとまった漁獲があった。中部以北でも前年同期を下回る漁況が続いたが、2002 年 12 月から中部以北の沖合域でまき網による好漁が続き、新潟県及び石川県では前年同期を上回る漁獲となった。

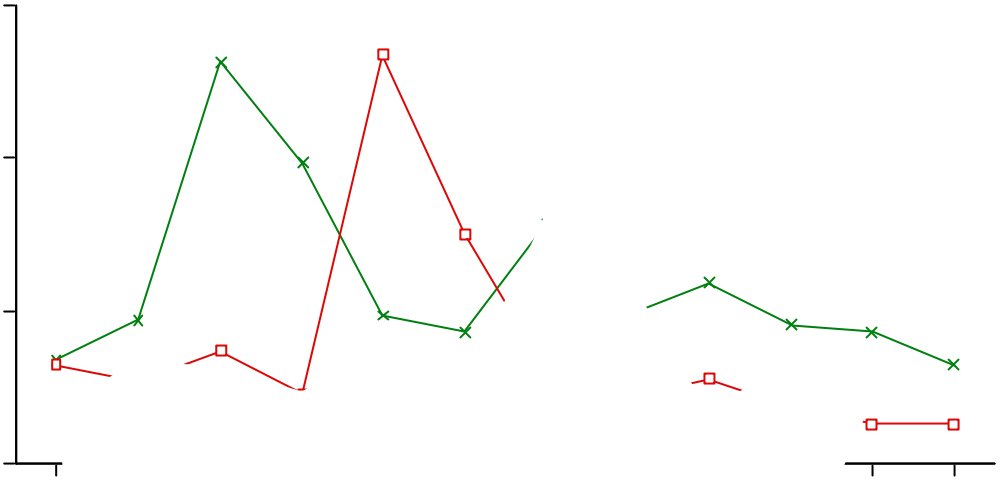
日本海西部では、春から夏にかけて体長 10㎝ 台後半の 1 歳魚（2001 年級）の占める割合が高く、初夏以降 0 歳魚（2002 年級）の加入も多く見られた。9-10 月の漁獲増は 0 歳魚が主体だったと思われる。中部以北では、時期や場所によって漁獲物のサイズはまちまちだったが、期間を通じて体長 10㎝ 前後かそれに満たない 0 歳魚が多く見られた。2003 年 1 月以降の中部以北の沖合域では、体長 20㎝ を超える 2 歳以上魚が主体だったと思われる。

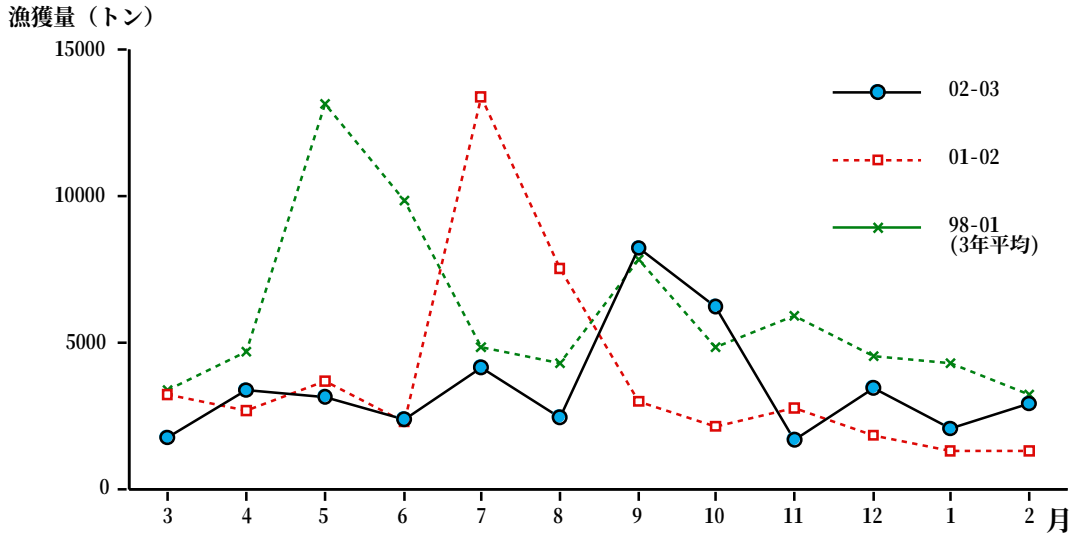
3. 今後の見通しの説明

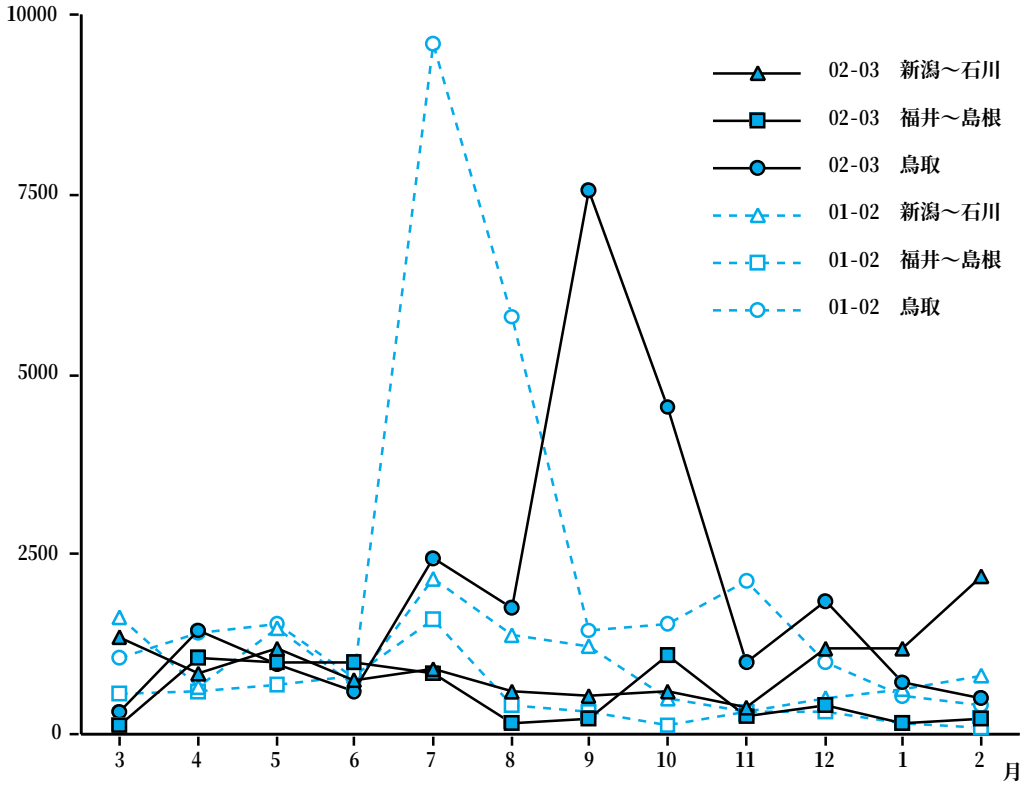
昨年の資源評価や漁況の推移から、今後の日本海西部における漁獲の主体は例年どおり 1 歳魚（2002 年級）で、初夏以降 0 歳魚（2003 年級）の割合が高くなると思われる。2001 年級群は豊度が高かったので 2 歳魚の水揚げも少なくないと予想される。2002 年級は、資源の豊度としては 2001 年級に比べやや低いもののかなりの分布量があり、2003 年級の加入は前年程度と見積もられている（平成 14 年度第 2 回東シナ海漁況海況予報、西海区水産研究所）。これらのことから、日本海西部海域から夏以降の中部以北海域では、来遊量は前年を上回ると考えられる。

日本海中部以北の沿岸域では、マアジ資源の各年級の由来や動向がはっきりせず、今後の来遊状況についても明確に予想することが難しい。しかし、京都府、石川県及び新潟県による体長測定の結果などから、2002 年 3 月以降 0 歳魚（2001 年に日本海内で産卵・ふ化したもの）が漁獲に占める割合が高く、夏季には産卵群の来遊が各地で認められ、また期間を通じて 2 歳以上魚の漁獲が見られた。これらのことから、今後の漁況は前年程度かこれを上回ると思われ、1 歳魚を中心にした相応の来遊が予想される。

なお、期間中 6 月までの対馬暖流域の表面水温はやや高め、50m深水温は平年並みで経過するとされ（平成 14 年度第 3 回日本海海況予報、日本海区水産研究所）、マアジ漁況への環境面からのマイナス要因は考えられない。

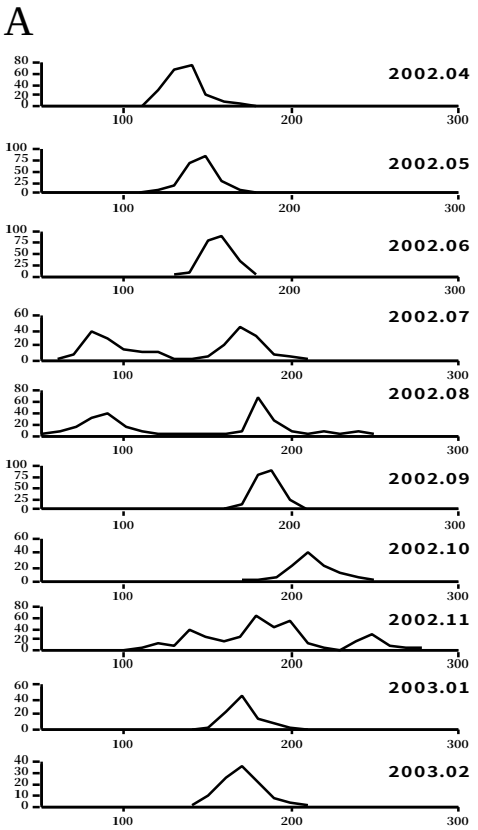


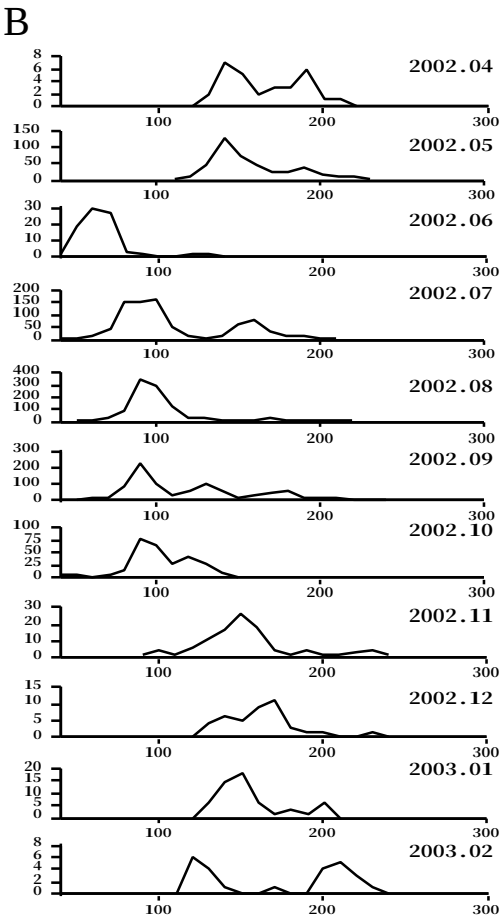


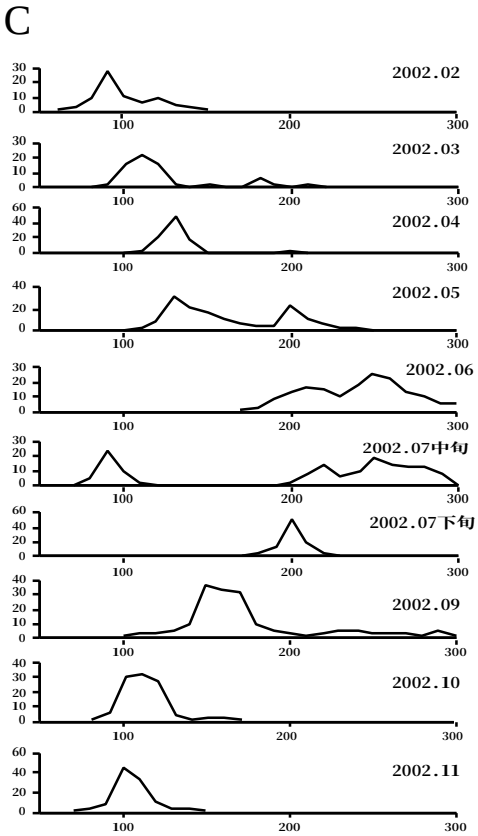


日本海主要港（新潟～島根）への水揚げの変遷

上：全域(1998-2003)，下：地域別(2001-2003)
※下図では、鳥取県のみを取り出し、その他の府県を東西で分けた。







体長組成（各県調べ）

A 島根県（中型まき網）

B 鳥取県（大中型・中型まき網）

C 石川県（定置網）